最後の子育て

長光寺住職　福島伸悦

少子高齢社会の中、またコロナ禍でお墓に関しての様々なことが変化してきました。子どもたちにできるだけ負担をかけないように代々受け継がれてきたお墓を永代にして整理し、自分たちのお墓は樹木葬にするか永代納骨供養にしてしまうかという選択肢をされる方が増えてきたと思います。
二世代三世代同居家族というのは昔は当たり前の姿だったのですが、この三十年で核家族化が進んで、家族に対する考え方も変わってきてしまいました。家族の絆、先祖様とのつながりというものが希薄になってきたと言う事です。

過日、「老いた母からの最期の子育て」という記事を目にしました。九十六歳のお母さんを看取った方からの投稿でした。その方がラジオ番組でこんな内容の話が聞こえて来たそうです。「親が年を取って衰えていくのはつらい事だが、それを子供に見せるのは親にとっての最後の子育てなのだ」その時、はっとしたそうです。「母親をお世話するのが大変なので子どもたちにはこんな思いはさせたくない。」と思っていましたが、今まさに母の最期の子育てを受けているのだと気づかされると、つらさが吹き飛び救われた気持ちになったと言う事です。そして、老いを我が子に見せたくない、世話になりたくないと考えてきたが、ありのままで良いのだと思えたというのです。

今の年配の人たちは、あまりにも子供たちに気を使い過ぎています。

生前、お葬式のこと、お墓のことで心配をされ相談に来られる方がおられますが、亡くなった後、お子さんたちがしっかりとお葬式を出されています。
子どもたちに迷惑をかけたくないという思いは、お子さんたちにしっかりと伝わっています。
生を受けたものは必ず死がやってくるわけです。最後は誰かにお世話していただかないといけないわけですから、生き方として人に迷惑をかけないように心がけて生きていくことは大事なことです。自分は自分で与えられた命を十分に精一杯生きる後姿を見せていくことに心がけていけばよいのではないでしょうか。